

わが一書

学びゆくために、また生きゆくために、誰にも、拠りどころとする先達の文や書があるだろう。私にとっては、三橋鷹女の第四句集『羊齒地獄』こそ、まさに“わが一書”である。三橋鷹女（一八九九—一九七二）は、女の情念と怨念を謳いつづけた、孤高の女流俳人として知られるが、『羊齒地獄』（一九六二）の序文で次ぎのように書いている。

一句を書くことは 一片の鱗の剥奪である

四十代に入って初めてこの事を識った

五十の坂を登りながら気付いたことは

剥奪した鱗の跡が 新しい鱗の芽生えによって補はれている事であった

だが然し 六十歳のこの期に及んでは

失せた鱗の跡はもはや永遠に赤禿の俣である

今ここに その見苦しい傷痕を眺め

わが軀を蔽ふ残り少ない鱗の数をかぞへながら

独り 呷く……

一句を書くことは 一片の鱗の剥奪である

一片の鱗の剥奪は 生きていることの証だと思ふ

一片づつ 一片づつ剥奪して全身赤裸となる日の為に

「生きて 書け……」と心を励ます

人にはさまざまな生き方がある。競うもよし、争うもよし、抗するもよし。勝つて傲然、負けて悄然、抗して屹然。どれもが生きている証であり、次なる生き方を導く。しかし、よく考えてみると、それぞれ異なるように見えて、どれも皆、同じ生き方である。つまりはどれも、相手あつて初めて意味をもつ生き方であり、生きている証は、自ら生み出すのではなく、いわば他から与えられるのである。このような他とせめぎあつてようやく自らを生かす“受動的な”生き方に比べ、せめぐ対象をもつばら自分にしほつた生き方はまさに生きる証を自ら生み出す“能動的な”生き方である。だが、言うは易く、行ふは難い。こうした生き方は、ほとんど凡人にできるものではなく、見渡してすぐに見出されるものではない。三橋鷹女は、ひたすらわが身をせめぎつつ一生を貫いた、数少ない先達のひとりである。

日本の我はをみなや明治節（一九三四年）

夏痩せて嫌いなものは嫌いなり（一九三五年）

ひるがほに電流かよひみはせぬか（一九三六年）

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉（一九三六年）

若き日の鷹女は、孤高に自分を謳った。しかし、それはまだ女の情念と怨念の世界から離れてはいない。だが、年老いてからの上の文に見る悽愴裂帛の生きざまはどうだ。もはや男女の性を超え、あらがうことも叶わず落剥していく鱗を見送りつつ、次第に近まりくる死を見据えて、しかし、狂おしいまでに身をせめいでいる。

枯蔓は焼くべし焼いてしまふべし（一九五二年）

鳶枯れて一身がんじがらみなり（一九五三年）

消炭を夕べまっかな火に戻す（一九五八年）

薄氷へわが影ゆきて溺死せり（一九五八年）

墜ちてゆく 炎ゆる夕日を股挟み（一九六〇年）

生きゆくことへの情念と怨念、生きていくということの悲惨と無惨、人間存在の逃れるす

べもない一本道。身体ごとの燃焼がたやすい若き日々ならともかく、次第に年を重ね、やがて晩年を意識し、まして残りの人生を掌の上に数えるような年になってなお、“他は知らず、我は我”と身をさらして必死に“生の証”を求め続けた鷹女。この狂おしいまでの、晩年の生きざま。老いてなお、否、老いたればこそそのすさまじさ……。

まるで、“生”そのものへの“恨み節”である。

芭蕉に見る“わび”と“さび”が静的、抑圧的な迫り方とするなら、鷹女のそれは、人間実存に対する動的、発散的な迫り方である。どちらが是、どちらが非とかいうべきものではない。だがしかし、豊かさに馴れて克己を忘れ、ここで甘え、かここで逆らい、安易に争つては安易に妥協する風潮の中では、自己を厳しく究めて止まぬ鷹女の生き方には言い知れぬ教えがあり、果てしなく身を揺すられる。身をせめぐる者には安易な対立や妥協、はたまた安易な退嬰もない。

とはいえ、厳しくも孤高な生きざまが凡庸な人間になしうるわけがない。平穏な日々を送りながら、せめて安逸を貪るの愚に陥らぬようにと、今日もまた、わが“師”となした一書を聞く。そして、病床の枕元に残されていたという、鷹女の遺作を、ひとり呟く。

千の蟲鳴く一匹の狂ひ鳴き（三橋鷹女 一九七二年）